

第76号 (50円)

昭和56年11月25日

内容

一般教育の現況と理想像…………… 1
 第18回大学教員懇談会…………… 2
 大学教員懇談会に参加して…………… 5
 事業部だより…………… 6
 わたしたちの合宿…………… 7
 ノースカロライナ・ジャパン・
 センターの日本語研修を終えて… 8
 千人会…………… 9
 利用状況…………… 9

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木(●192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス
 企画室

編集人・中川秀恭 発行人・岡山肇
 製作 中央公論事業出版

一般教育の現況は、一口でいえば、その基本的方向がさまざま、実践がカラ廻りし、形骸化・空洞化が進行している。

国大協の「教養課程に関する特別委員会」は、二年前「教養課程組織改編に関する調査報告」を出した。この報告は一般教育に関するつぎの二つの方向を内容とする。一つ(A)は、四年一貫教育体制の下に専門教育と一般教育を大学教育の強い柱に再置する方向であり、もう一つ(B)は、一般教育の内容を専門基礎教育に調和させる方向である。同報告書によると、(A)は理想的には支持したいのだが、実際上空洞化していることから、現実的解決の方向として(B)が妥当であると大々的である。

しかし、この結論は大きな問題を含んでいる。それは、専門基礎教育が一般教育の理念と異なるという立場もあり、この立場をとる限り、この結論は四年一貫教育体制下での一般と専門との同時展開の途を断念しているといわざるをえないからである。この二つの方向の相違をどういう人間を育てるかの視点からいえば、(B)は特殊を深めるスペシャリストの養成にあり、(A)は人間としてのジェネラリスト、つまりどんな仕事についても、人間としての共通課題は何かを追求する人間の育成にある。このねらいの違いは、専門教育と一般教育の本質的な差異性にもとづく。専門教育が特殊を深めることであるのに対して、一般教育は特殊を普遍性の水準で取り扱う。専門ではその専門性によって人間同士を分離していく遠心的分離力が働くとするれば、一般教育で

一般教育の現況は、一口でいえば、その基本的方向がさまざま、実践がカラ廻りし、形骸化・空洞化が進行している。

国大協の「教養課程に関する特別委員会」は、二年前「教養課程組織改編に関する調査報告」を出した。この報告は一般教育に関するつぎの二つの方向を内容とする。一つ(A)は、四年一貫教育体制の下に専門教育と一般教育を大学教育の強い柱に再置する方向であり、もう一つ(B)は、一般教育の内容を専門基礎教育に調和させる方向である。同報告書によると、(A)は理想的には支持したいのだが、実際上空洞化していることから、現実的解決の方向として(B)が妥当であると大々的である。

しかし、この結論は大きな問題を含んでいる。それは、専門基礎教育が一般教育の理念と異なるという立場もあり、この立場をとる限り、この結論は四年一貫教育体制下での一般と専門との同時展開の途を断念しているといわざるをえないからである。この二つの方向の相違をどういう人間を育てるかの視点からいえば、(B)は特殊を深めるスペシャリストの養成にあり、(A)は人間としてのジェネラリスト、つまりどんな仕事についても、人間としての共通課題は何かを追求する人間の育成にある。このねらいの違いは、専門教育と一般教育の本質的な差異性にもとづく。専門教育が特殊を深めることであるのに対して、一般教育は特殊を普遍性の水準で取り扱う。専門ではその専門性によって人間同士を分離していく遠心的分離力が働くとするれば、一般教育で

一般教育の現況は、一口でいえば、その基本的方向がさまざま、実践がカラ廻りし、形骸化・空洞化が進行している。

国大協の「教養課程に関する特別委員会」は、二年前「教養課程組織改編に関する調査報告」を出した。この報告は一般教育に関するつぎの二つの方向を内容とする。一つ(A)は、四年一貫教育体制の下に専門教育と一般教育を大学教育の強い柱に再置する方向であり、もう一つ(B)は、一般教育の内容を専門基礎教育に調和させる方向である。同報告書によると、(A)は理想的には支持したいのだが、実際上空洞化していることから、現実的解決の方向として(B)が妥当であると大々的である。

しかし、この結論は大きな問題を含んでいる。それは、専門基礎教育が一般教育の理念と異なるという立場もあり、この立場をとる限り、この結論は四年一貫教育体制下での一般と専門との同時展開の途を断念しているといわざるをえないからである。この二つの方向の相違をどういう人間を育てるかの視点からいえば、(B)は特殊を深めるスペシャリストの養成にあり、(A)は人間としてのジェネラリスト、つまりどんな仕事についても、人間としての共通課題は何かを追求する人間の育成にある。このねらいの違いは、専門教育と一般教育の本質的な差異性にもとづく。専門教育が特殊を深めることであるのに対して、一般教育は特殊を普遍性の水準で取り扱う。専門ではその専門性によって人間同士を分離していく遠心的分離力が働くとするれば、一般教育で

は人類の課題にむかう求心的調和力が働く。このように二つの方向は相互に逆の方向に働くという基本的相違を確認しておく必要がある。大学基準協会が「一般教育研究委員会中間報告」(昨年12月)の中で、上述の国大協の結論を専門に対する一般教育の従属観であるとして強く批判しているが、この批判は正当であらう。

一般教育不毛の現況のなかで、一般教育理念の純粋性の追求というところから、一般教育の総合科目化が志向されてきている。それは専門の基礎教育科目が多くなる場合単一科目であることとの対比から、総合科目こそが一般教育の純粋性を保ちうるのと考え方に依拠している。すでに三一年お茶の水女子大学で総合コースが実施されたが、これが現場の問題となったのは、ちょうどこの三一年に「大学設置基準」が制定され、その中で基礎教育科目が法制上に明確に出されてきたからである。このように一般教育と基礎教育との混同についてはそれ以前からも指摘されてきたところであらうが、この大学設置基準およびことに最近における一般教育理念の放棄の傾向に対抗して、一般教育の独自性は総合科目にあるという方向が流行現象となっている。この総合コースの方向の流行は、一つには過度の専門分化、知識の細分化への対

は人類の課題にむかう求心的調和力が働く。このように二つの方向は相互に逆の方向に働くという基本的相違を確認しておく必要がある。大学基準協会が「一般教育研究委員会中間報告」(昨年12月)の中で、上述の国大協の結論を専門に対する一般教育の従属観であるとして強く批判しているが、この批判は正当であらう。

一般教育不毛の現況のなかで、一般教育理念の純粋性の追求というところから、一般教育の総合科目化が志向されてきている。それは専門の基礎教育科目が多くなる場合単一科目であることとの対比から、総合科目こそが一般教育の純粋性を保ちうるのと考え方に依拠している。すでに三一年お茶の水女子大学で総合コースが実施されたが、これが現場の問題となったのは、ちょうどこの三一年に「大学設置基準」が制定され、その中で基礎教育科目が法制上に明確に出されてきたからである。このように一般教育と基礎教育との混同についてはそれ以前からも指摘されてきたところであらうが、この大学設置基準およびことに最近における一般教育理念の放棄の傾向に対抗して、一般教育の独自性は総合科目にあるという方向が流行現象となっている。この総合コースの方向の流行は、一つには過度の専門分化、知識の細分化への対

は人類の課題にむかう求心的調和力が働く。このように二つの方向は相互に逆の方向に働くという基本的相違を確認しておく必要がある。大学基準協会が「一般教育研究委員会中間報告」(昨年12月)の中で、上述の国大協の結論を専門に対する一般教育の従属観であるとして強く批判しているが、この批判は正当であらう。

一般教育不毛の現況のなかで、一般教育理念の純粋性の追求というところから、一般教育の総合科目化が志向されてきている。それは専門の基礎教育科目が多くなる場合単一科目であることとの対比から、総合科目こそが一般教育の純粋性を保ちうるのと考え方に依拠している。すでに三一年お茶の水女子大学で総合コースが実施されたが、これが現場の問題となったのは、ちょうどこの三一年に「大学設置基準」が制定され、その中で基礎教育科目が法制上に明確に出されてきたからである。このように一般教育と基礎教育との混同についてはそれ以前からも指摘されてきたところであらうが、この大学設置基準およびことに最近における一般教育理念の放棄の傾向に対抗して、一般教育の独自性は総合科目にあるという方向が流行現象となっている。この総合コースの方向の流行は、一つには過度の専門分化、知識の細分化への対



一般教育の現況と理想像

甲南女子大学教授
 一般教育学会会長

扇谷尚

抗として発達した一般教育運動の伝統の再確認にもとづいて分化した学問分野・知識領域の間の相互関係とその全体性を追求することにあるのだが、もう一つ、OEC DのCERIが提起した、大学教育と研究の「革新のカギ概念」としての「学際性」の主張(一九七二年)と相俟っている。この総合コースの調査(55年度)によれば、五一・五%(三四・二%が実施、一七・三%が開設備)が実施ないし準備中となっている。

あとへの問題提起の意味からこの「流行現象」に対してここで問題点を一つだけ指摘しておく。

抗として発達した一般教育運動の伝統の再確認にもとづいて分化した学問分野・知識領域の間の相互関係とその全体性を追求することにあるのだが、もう一つ、OEC DのCERIが提起した、大学教育と研究の「革新のカギ概念」としての「学際性」の主張(一九七二年)と相俟っている。この総合コースの調査(55年度)によれば、五一・五%(三四・二%が実施、一七・三%が開設備)が実施ないし準備中となっている。

あとへの問題提起の意味からこの「流行現象」に対してここで問題点を一つだけ指摘しておく。

抗として発達した一般教育運動の伝統の再確認にもとづいて分化した学問分野・知識領域の間の相互関係とその全体性を追求することにあるのだが、もう一つ、OEC DのCERIが提起した、大学教育と研究の「革新のカギ概念」としての「学際性」の主張(一九七二年)と相俟っている。この総合コースの調査(55年度)によれば、五一・五%(三四・二%が実施、一七・三%が開設備)が実施ないし準備中となっている。

あとへの問題提起の意味からこの「流行現象」に対してここで問題点を一つだけ指摘しておく。

第一に大学生活が高校と職場との間のモラトリアム期間となっており、学習に積極的な責任をとらない。第二は偏差値による大学選別のために非専門的な一般学生が入学し、専門性の意識がない。第三は自己確認の不在であり、第四は、現象と本質との区分ができず、以上による言語表現の貧困化でない予定論のみでは教育不在に陥ってしまう。

このように学生の自己責任の原理では既にすくわれたいとすれば、大学を学校化していくことが必要となってくる。大学の学校化とは、学習目標の明示、問題意識の喚起、課題の設定、思考方法の開発、研究方法の手がかりを与えて学生の思考を主体的に形成するための発達支援の原理をうち出すということである。学校化も単に教え方というような対症療法的な問題として捉えるのではなく、もっと根本的に大学が人類学的に果たした伝統的使命を遂行するために学部の原理は何か、人間の知的活動の現状に対する批判的精神の行使はどうするか、その一環として、プロセス無視による結果の暗記という学習態度に対する批判的修正などが必要となってくる。その際に重要なことは、①専門と一般の関連性の見直し(同時展開)、つまり両者の交点をみつけること、②大学教育をうけた人間がどのような特性・能力をもっているかを明らかにすることであり、これらが大学カリキュラム構成の際の初歩的、基本的手段とならねばならない。

(次ページ4段めへつづく)

第一に大学生活が高校と職場との間のモラトリアム期間となっており、学習に積極的な責任をとらない。第二は偏差値による大学選別のために非専門的な一般学生が入学し、専門性の意識がない。第三は自己確認の不在であり、第四は、現象と本質との区分ができず、以上による言語表現の貧困化でない予定論のみでは教育不在に陥ってしまう。

このように学生の自己責任の原理では既にすくわれたいとすれば、大学を学校化していくことが必要となってくる。大学の学校化とは、学習目標の明示、問題意識の喚起、課題の設定、思考方法の開発、研究方法の手がかりを与えて学生の思考を主体的に形成するための発達支援の原理をうち出すということである。学校化も単に教え方というような対症療法的な問題として捉えるのではなく、もっと根本的に大学が人類学的に果たした伝統的使命を遂行するために学部の原理は何か、人間の知的活動の現状に対する批判的精神の行使はどうするか、その一環として、プロセス無視による結果の暗記という学習態度に対する批判的修正などが必要となってくる。その際に重要なことは、①専門と一般の関連性の見直し(同時展開)、つまり両者の交点をみつけること、②大学教育をうけた人間がどのような特性・能力をもっているかを明らかにすることであり、これらが大学カリキュラム構成の際の初歩的、基本的手段とならねばならない。

(次ページ4段めへつづく)

第一に大学生活が高校と職場との間のモラトリアム期間となっており、学習に積極的な責任をとらない。第二は偏差値による大学選別のために非専門的な一般学生が入学し、専門性の意識がない。第三は自己確認の不在であり、第四は、現象と本質との区分ができず、以上による言語表現の貧困化でない予定論のみでは教育不在に陥ってしまう。

このように学生の自己責任の原理では既にすくわれたいとすれば、大学を学校化していくことが必要となってくる。大学の学校化とは、学習目標の明示、問題意識の喚起、課題の設定、思考方法の開発、研究方法の手がかりを与えて学生の思考を主体的に形成するための発達支援の原理をうち出すということである。学校化も単に教え方というような対症療法的な問題として捉えるのではなく、もっと根本的に大学が人類学的に果たした伝統的使命を遂行するために学部の原理は何か、人間の知的活動の現状に対する批判的精神の行使はどうするか、その一環として、プロセス無視による結果の暗記という学習態度に対する批判的修正などが必要となってくる。その際に重要なことは、①専門と一般の関連性の見直し(同時展開)、つまり両者の交点をみつけること、②大学教育をうけた人間がどのような特性・能力をもっているかを明らかにすることであり、これらが大学カリキュラム構成の際の初歩的、基本的手段とならねばならない。

(次ページ4段めへつづく)

第18回大学教員懇談会

主題——大学教育のあり方

——一般教育を中心として——

期日——昭和56年9月26～27日

電気通信大学教授 大山 哲雄

早稲田大学教授 河原 宏

東京大学教授 小林 善彦

東京農工大学教授 原口 隆英

千葉大学教授 本間 三郎

東京大学助教授 村上陽一郎

△参加者V64名

東京大、電気通信大、東京理科大

(各4)、千葉大、東京農工大、中

央大、上智大、明治学院大(各3)、

東京工大、お茶の水女子大、都立

大、国際基督教大、文教大、青山

学院大、芝浦工大、順天堂大、東

京女子大、法政大、立教大(各2)、

東京学芸大、広島大、甲南女子大、

専修大、東海大、東京農大、東京

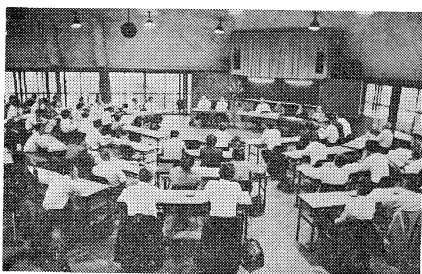
薬科大、東洋大、日本大、日本女

子大、武蔵工大、早稲田大、久留

米大、国立教育研究所、文部省大

学局大学課(各1)

(注) 発題者、世話人を含む



熱心な論議がつつく大学教員懇談会 (講堂)

戦後、大きな社会的期待をもつて発足した新制大学構想の成否のカギの一つが一般教育のあり方にあることは大方の認めるところである。大学セミナー・ハウスは設立以来、戦後の大学教育、とくに一般教育への批判、反省とその欠陥の補充をめざしてきたのである。第2回大学教員懇談会はいち早くこの問題を採り上げたのである。以来一〇年、その後の状況をふまえ、その理念と実態を総括、点検してみてもとの企画が「大学

教員懇談会委員会」準備委員会で決められ、大川信明委員を代表とする世話人会がその具体化に当たり、今回の開催のはこびとなった。幸いに発題者の好意と参加者の熱意によって、終始活発な意見の交流がなされ、充実した討論が得られた。

定刻15時、講堂に参集の参加者を前に開講式、中川秀恭館長、井早康正委員長、大川信明世話人代表の挨拶のあと、ただちにセッションI、朱牟田・扇谷・木田三氏による発題講演の部に入った。

まず朱牟田夏雄氏「一般教育の理念と歴史」は、戦後東大教養学部の発足以来、6代目の教養学部長就任の三年をはさみ、停年退官までの駒場での長い経歴をふりかえりつつ、淡々たる語り口の中にズバリ問題の核心に迫るものがあり、つぎの論議への格好の道案内役をつとめられた。

「新制への切り替えがGHQの意図をどこまで生かし守ったかは疑問だし、むしろ旧制高校、大学予科の下地があったゆりなり



朱牟田氏

にもここまでするのだと私などは思っている。ただ、本郷(専門学部)と駒場(教養学部)の間に見解の距りや曲折があるのは事実であり、こうした事情がまた他大学にも多く共通して見られるところがまさに問題だ」として、大要つぎのように語られた。

「問題の第一は、一般教育課程のスタートがやがて継ぎの立場でスタートし、それがさまざまなひずみを生んだこと。第二は、一般教

(前ページよりつづく)

内容編成に際して考慮すべきことは価値判断力の育成である。人間が自己の意思決定を行う場合、その決断に際して価値がどのような営みをするのか。知識分野の総合のみにとどまらない精神内部での価値判断基準がどのような係わりをもつのか。このような価値判断力の育成に直接かかわる内容が、例えば、総合科目でテーマの展開を考える際にも必要となってくるということである。例をとれば、法律はかつては国家権力を擁護するものであったが、今日では人民の権利を保障するためのものに変わりつつある。当然そこで法律家になる者にとつてはその価値葛藤に遭遇することになるのだが、その際に自己の役割葛藤を冷静に分析し、賢明な洞察をもって解決に当たるための教育内容を考慮されねばならないということ。それは意味しているのである。

状況では、日本の大学の学部教育はリベラル・アーツであればよいとばかりはいってられない。そこで、アンダーグラジュエイト・プロフェッションナル・スクール型ではあるが、そのプロフェッションナルの教育をもつとリベラルなものにかえていくをどうすればよいかというのを考えている。その際に役割葛藤モデルによるカリキュラム編成を基盤にした、一般教育と専門教育の統合が図られねばならない。

さらにもう一つ。学問それ自体が、無知・偏見からの解放、精神の自由をめざすための人間の社会的(教養社会)を創っていくことが課題となる。またそのために教養大学というものを将来における大学の一つの有力な形態として承認していく必要がある。

もう一つこの考え方の特徴は、つぎのような一般教育の目標の上に構成されているということである。すなわち、I 基本的技能(A 読書・作文・聴き方・話し方・討論・外国語・計算・数学のそれぞれの技能、B 実際の生活場を切りひらいていく基本的思考力、C 理論を生活に關連づけて実践行動に移すに必要な判断力) II 問題解決と批判的思考の技能、意思決定と価値葛藤解決の技能。III 機能的理解力(人文・社会・自然の他に異文化、人間の発達)。IV 統合能力である。

私は、学部教育のあり方については国大協の委員会の結論とは反対に、一般教育を中核とする方向を考えている。しかし、大学院生数が大学生数の三・一％という現

Iを四年間で身につける際に、それを独立させる場合もあるが、当面の問題としては、このI・IIをもっと明確に意識して、これをそれぞれの授業の中でどう達成していくかをチェック・ポイントにすることによって、現実をもっと活性化することができるといえる。

育科目の選定がきわめて一律なこと。人文・社会・自然科学の科目の配分にもっと柔軟性があつて

いいし、自分の専門科目から遠いものも採ってほしいと私なども言うてきたが、日本人は一律好き

(第18回大学教員懇談会の発題講演より、文責・編集者)

で、ついに実現せずに来てしまった。第三は一般教育担当者の問題だ。担当選任にあたって、未熟者は駒場へ、成熟を待って本郷へという考えが得て出て出がらぬ。これが当然教師にも反映して、駒場では最少の労力で最少限の義務を果たそうといった姿勢を生み、これがまた学生の蔑視を招く。イギリスなどでは一般教育だけの専任教授の話をしても信じられない。たまたま私の見たサセックス大学では一般教育だけの講義がそもそもない。前期課程で行われる、たとえば経済学の講義は、経済学専攻の学生には専門課程の一単位、他の学生には教養課程の一単位にそれぞれ認められる。そして前期課程を総合的にテストする試験(いわゆる暗記試験ではない)に合格した者が後期(専門課程)に進むことになっている。東大でも、かつて南原繁氏が、文・理が机を並べて教わる一般教養を考えていたが、実現せずに終わった。第四は待遇の問題。現在、大学院担当手当が出ているが、その前になぜ一般教育担当手当を出せないのか。そこに問題は端的に表われているように思われる」

◇ ついで扇谷尚氏「一般教育の現状と理想像」は、氏の多年にわたる学理研究と近畿地区の一般教育担当者間での研修成果に裏打ちされた犀利な実態分析と問題整理のための確かな視座を提供し、以後の論議のまとめ役を買って出られた(講演要旨は1ページに掲載)。発題講演の最後は木田宏氏「大学教育の未来に望む」。「私たちの将来社会を主体的に



木田氏

生きる上で考えるべきならぬ必然的条件として、高年齢化、情報化、国際化の三つをあげたい。この三条件をふまえ、これを踏みこえて、来たるべき地球社会に生きるには、今までと違った行動力が必要だし、大学はそうした人間の能力の拡大をどう考えるべきかが、今日の問題です」と前置きし、大要つぎのように語られる。

「明治初頭以来の教育は初等教育の充実、明治後期以後は中等教育の育成、戦後はさらに庶民教育を中等教育から高等教育のレベルまで引き上げてきた。そして現在は大学進学率四〇%までに至った。これはアメリカにつく高率だ(ただし二歳の時点での大学在籍率では国際順位もグッと下がるのが日本の特徴だ)。けれども、その上のエリート養成においては、戦前の旧帝大生五万三千人(昭和15年)の数がたまたま今日の大学院生総数とほぼ見合っており、この点ではこの四〇年間、足踏み状態にあったといえる。つまり、戦後大学を横に伸ばすことはしたが、縦に伸ばすことはしなかった。

戦後のこうした教育実態は産業界の、中堅技術者を早く大量に求めたいとする要請にそったものであり、外国と比べても、この狙いは比較的うまく当たった。これからの問題の一つは大学院教育にある。社会人をもとり込んだの大学院教育の充実、拡張をはかるべきで、大学院に入るなら勤めをやめて来いなどという古い頭ではどうしようもない。

もう一つ、日本人が国際的な仕事をしたいの一番まずいのは内と外の観念、その使い分けだ。自分の専門領域に閉じこもって、自分の論理でしか物を見ない、いわゆる専門バカになるのを防いで、外からの論理をも身につけさせるのが一般教育だと思ふ。コミュニケーションの中にある内外の感覚を、学問的な視点から少しづつ正していく。そこからはじめてクリエイティブな仕事が出てくるのだと、私は思う」

◇ ティー・タイムで少時休憩のあと、16時からセッションII、中條利一郎・石川孝夫両氏を発題者とするパネル・ディスカッション「自然科学の立場から」に入る。



中條氏

まず中條・石川両氏の発題が各三分ほどなされ、のちそれをめぐる討議があったが、討議については紙面の都合もあり、セッションIII、IVと合わせ、一括して最後に報告することにした。中條氏はまず、「私は今お話の三人の先生方とちがひ、新制大学の出身で、一般教育の受講者というわけです。大所高所からなご柄でないし」とぼしい事例から発題したい」と前置きし、つぎの五点を問題として指摘された。

第一は用語の問題。自然科学の講義では中・高・教養・専門の各課程で同一用語が三〜四回登場する。用語の既知から内容も既知と誤解される恐れがある。これへの対策として東工大の事例、教養課程から二、三年次までの「物理化学」の一貫教育(かたづけ型)

と、これと並行して有機化学の専門教育(ちらかし型)を紹介、密度を高めての授業方法の必要を強調。

第二は語学(国語を含めて)力の欠如。ただしこれは本質的な欠如でなく、語学教育の欠陥の故で対策は可能はず。

第三は知識と生活の遊離。これには入試の弊害がある。対策として千葉大での総合講義の事例を紹介、他学部、他大学のスタッフをも加え、自然・人文・社会の諸領域にまたがって、学理面から実際面まで多面的な視角を与えようとする。その試みに、一つの可能性を示唆。

第四に学理教育と各種学校の実学教育のバランス。自然科学系にとくに要求される情報処理、社会教育。

第五に通論の必要。個別に得た知識をシステムとして理解させるカリキュラム上の工夫。序論―各論―通論の順で、卒業年次に通論を学ばせることを提案。

◇ つづいて石川氏は、豊富な例証と軽妙な語り口で随時会場を湧かせながら、「知識と生活の遊離」ということにマトをしぼって、つぎのような問題提起をされる。



石川氏

「現在の物理教育で最も大きい障害は、日常生活と教科書が遊離していること。それは、日常生活の水準にくらべて教科書が進みすぎているからではなく、日常生活の進歩に教科書が取り残されているからだ。そもそも学問そのものが時代からズレてきている

ことに問題がある」とし、例え話として、持参のストップ・ウォッチを取り上げ、かつてわれわれのあこがれのマトであり、ステータス・シンボルでもあったこの品が、今の大学生にとってはいかに古くさか、バカバカしい代物になっているか。これと同じことが授業にも起こっていることを、さまざまの例証をあげて説かれる。

「身近なものから題材を」が実際は教師のご幼少のころに時代を逆行させる。人や馬が車を引いた時代ならいざ知らず、今どき、ものを動かすのに力が必要だ式の力学から始まる物理の教科書。慣性の法則を説明するのに「だるまをの登場させたり、世間には用いられる例のない「ニュートン」や「kg重」という単位表示を平然とつかうといった感覚、等々、諸講の中にも辛辣をこめた数々の事実の指摘のあと、力学から始まる在来の教科書に替えて、「電池とモーターから始まる高校理科」計画の試みの意図が開陳され、参加者のつよい関心と質問を呼んだ。

◇ 夕食後、19時から再び講義に参集、セッションIII、金子貞吉・斎藤淳淳両氏を発題者とするパネル・ディスカッション「人文・社会科学の立場から」が始められた。金子氏は、「経済学を専攻して



金子氏

いる手前、データなしではものが言えないものですから……」と前置きしながら、氏の作成による私立八大学の調査データにもとづいて、一般教育科目設置の実情

とその取得状況につき、つぎのよ
うな分析と問題の指摘をされる。

第一に、卒業に必要な単位数
(二四・一六〇)のうち一般教
育科目の占める率が相対的に減り
つつある。具体的には三六・二四
単位、率にして二九・一七%。さ
らにその取得状況の多様化がめだ
ち、人文・社会・自然各三科目一
二単位、計三六単位必修の従来型
は少数、大半は自由選択の幅をも
たせ、中には各分野一科目四単位
を最低とする学部も一科目四単位
できている。そして、そこには総
合講座や自由科目、教養演習等
による工夫とともに、一般教育に代
替しての基礎教育科目や専門教育
科目の進出、増加が見られる。ま
た一般教育科目のうち、概説的、
総論的科目がやはり各大学に共通
して顔を出している。具体的には
人文・哲学・歴史・文学、社会
政治学・社会学・法学、自然・数
学といった具合。

第二に、教育組織の問題。とく
にタテ割制をとる大学で一般教育
科目を担当する場合、つぎの問題
に逢着する。①専門担当者而非専
門担当者の格差、②研究の孤立、
③学部運営の困難さ、④大学院担
当からの排除。

第三に、学生の実情について。
学生の水準低下と、他方での技
術・実務教育要求への対応である。
後者については専修学校に譲り、
大学は根底的・本質的な学問を教
え、原理的のもの考える人間と
能力を養成すべきではないか。
最後に、専門科目担当者の視角
からの要請として、①一般教育問
題への全学部による解決努力、②
専門教育科目にもコア・システム

の設定、③高度な専門性と広範な
視野の拡張、④学際化の再志向。

◇ ついで斎藤氏の発題である。



斎藤氏

「今日は討議を行うため、文部
事務官の立場
はなれて、私見
を述べさせていただきます。
現
た
だ
き
ま
す。」

行制度を大きく超えて、ただちに
実行できない部分も多いと思いま
すが、その点にはご容赦ねがいた
い」と前置きして、大要つぎのよ
うな問題提起をされた。

一般教育問題を論ずる場合、と
かく組織防衛的な発想が多くて、
教育を受ける学生の立場への考慮
が抜けがちなのではないか。今やレ
セ・フェールの時代、大学自治の
時代で、一般教育のあり方にもつ
と弾力性をもたせ、その多様化を
はかるべきではないか。以下はそ
うした趣旨からの私見である。

①最終学年で一般教育を行う例。
専門課程を低学年に行い、一般教
育は卒業時に集中的に行う。これ
により従来の制度や組織運営にな
い新しい発想が期待できないか。

②一般教育だけで専門教育のない
門教育自体が一般教育の使命をお
びている例も多い。法学、経済
学、工学など、リベラル・アーツ
としてこれをとらえ、すでにい
つかの大学の教養学部、総合科学
部などの例にあるような、専門・
一般の統合を考えたらどうか。

③生活技術や職業技術的なものを
一般教育にとり入れる例。美術
(茶・華道等)もふくめて、工芸、
文章作法、救急、医療保健、タイ
プ、速記、簿記、会計、情報プロ

グラミング等々、トレーニング・
スクールの要素をもたせ、今日の
社会が要請する高度な実際の知能
を与えるようにしたらどうか。

④専門課程と一般教育課程の関連
について。他学部の専門科目を一
般教育とする方式(大学設置基準
24条)をもっと採用する。また、
一般教育の責任を、たとえばクラ
ス担任を専門課程の教官に分担さ
せるなど、各学部の教官にもたせ
る方式、等々、もっと総合大学な
どの折角のメリットを生かす工夫
はないか。

⑤外国語教育について。大学教育
にどの程度の外国語教育が必要か
の問題がある。現状は語学または
外国語文学に偏りすぎていない
か。ある場合には各種学校との連
携を考えてもいいのではないか。

以上の発題をめぐり質疑、批
判、答弁と、討論の輪はひろが
り、熱気のうちにつつけられた
が、2時30分ひいとまず打ち切り、
あとは翌日というところで、場所を
食堂に移し、参会者一同、しばし
懇談をたのしんだ。

◇

二日目は朝食のあと、9時30分
より正午までが、セッションIV、
全体会に当てられ、前日の発題を
受けての総括討論が行われた。

「この会は結論を出すのが目的
の会ではありませんし、公式には
話せないこともフリーに発言し合
えるのが特徴です。ひとりひとりの
遠慮のないご発言を」との司会
者のすすめで、内容は多岐にわた
り、白熱、時に爆笑を呼んだりも
した。討論が必ずしも十分噛み合
ったとはいえないが、そのこと自
体が一般教育をめぐる問題の奥行

きの深さを示すものともいえよ
う。紙面の都合からここではその
一端を記すにとどめる。

○一般教育の眼目は何か
人間の価値の高揚、価値識別能
力の養成を眼目にあげ、そうした
見地から、まず現代の知的活動全
般に対する批判精神の涵養と自己
啓発への指導を説く論。専門教育
との関連から、アカデミズムの基
本として原理・原則の体得、現象
より本質理解を説く論に対しては、
現象の軽視は困る、日常生活
と理論の遊離こそ問題で、狭い専
門の殻を破った総合的、実際の知
識の教育こそが求められるとする
論、そのため学際的総合コース
の意義を説く論などが出された。

○一般教育の大学教育における位
置づけ
一般教育の目標をリベラル・ア
ーツに置き模索しているのが現状
で、大学教育の中核はあくまで一
般教育にあり、その焦点が専門
課程と見るのが正しいとする説に
対して、社会的要請としてますま
す強まりつつある職業技能教育的
側面をとり込んでの専門性を重視
する四年制一貫教育こそ本来の姿
だとし、一般教育の専門基礎教育
への調和を主張する説があり、こ
の間の討論が今後の宿題に残され
た形。

○一般教育の与え方
最終学年で一般教育を行ったら
という斎藤氏の問題提起に対して
は賛否両論。実際は一般科目も卒
業時までにとるケースが多い、一
般・専門並行の現状を認めるがよ
いの説、より意識的、積極的な
カリキュラムの再構成を主張する
説などが見られた。

科目選択については、現在の学
生の水準低下の状況をふまえ、指
導の強化を主張する説と、学生自
身による選択自由度の拡張を主張
する説の両論に分かれた。

また木田氏から大学設置基準に
ついて、そもそも一二単位を振り
替え可能としたのは、専門課程
との関連で、その重複を避ける趣
旨だったのが、現状はかならずし
もその趣旨にそっていないので驚
いている、との発言がなされた。

一般教育担当者の問題について
は、専門の、できれば大家の担当
が望ましいが、すべて実現できる
わけではない。老朽教授ではかえ
って困る場合もある。一般教育に
はそれなりの特殊な技術も要求さ
れるので、適切な研修こそが望ま
れるとの意見があった。

かくして二日にわたる討論は盛
会裡に終わり、食堂での送別昼食
会を経て散会したのは定刻13時す
ぎだった。

最後にご多忙の中、発題に協力
された諸先生、企画・運営にお骨
折いただいた大川信明氏はじめ世
話人諸氏に心から感謝したい。

なお、この懇談会のくわしい討
議内容については、企画室で記録
書を作成、来春に刊行、希望の向
には実費頒布の予定である。

一般教育の目標をリベラル・ア
ーツに置き模索しているのが現状
で、大学教育の中核はあくまで一
般教育にあり、その焦点が専門
課程と見るのが正しいとする説に
対して、社会的要請としてますま
す強まりつつある職業技能教育的
側面をとり込んでの専門性を重視
する四年制一貫教育こそ本来の姿
だとし、一般教育の専門基礎教育
への調和を主張する説があり、こ
の間の討論が今後の宿題に残され
た形。

最後にご多忙の中、発題に協力
された諸先生、企画・運営にお骨
折いただいた大川信明氏はじめ世
話人諸氏に心から感謝したい。

◆第18回大学教員懇談会に参加して

さらに幅広い討論を

広島大学教授
関 正夫

日本の大学における一般教育は、戦後新制大学の出発に際し「光源」と期待され導入されて以来、苦難の道を歩んできた。今日においても一般教育は、制度論・教育課程論等の諸側面からみて、専門教育に付属した位置に低迷している。だが大学の大量化状況の中で一般教育への期待は決して小さくはない。こうした意味で今回の企画は、テーマ設定、講師の人选等、私にとっては魅力的なものであった。非会員の私が本会に敢えて参加申込みしたのはそうした理由からである。

大学教育研究に関心をもち私にとっては、今回の大学教員懇談会から学んだものは多い。一例を挙げると、大学紛争終焉期に実施された「大学設置基準（一般教育関係）改訂」の行政関係者の意向と大学（特に専門学部）関係者の対応の間には大きな「ズレ」があったことを知ったことである。一般教育の弾力化を指向した大学設置基準改訂が、現実には、総じていえば一般教育縮小という方向にしか作用していないのである。共通一次試験に関しても企画・立案関係者の意向と大学及び社会のそれへの対応には大きな齟齬がみられる。今後は政策実施に先立ち、工

学技術の社会への適用の場合と同様に、事前評価の導入が不可欠になってきたと痛感したのである。

また各セッションの討議において各大学一般教育関係者から一般教育改善の事例が数多く紹介されたことも私にとっては有益であった。ただ、少々残念に思えたことは、今日学生からも敬遠されがちな一般教育を魅力あるものにするためにはどうすればよいかといった観点からの討議が乏しかったことである。

今後大学セミナー・ハウスにおいても、また全国各地、各大学においても、一般教育の問題は大学教員だけでなく、学生・卒業生、高校教育関係者、行政関係者等、多様な人々によって論じられる機会がもたれることを期待したい。

心意気に感動

東京都立大学教授
兼子 仁

まことに充実した二日間で、大いに得るところと考えさせられるところがあった。世話人の方々とうち大学セミナー・ハウスに深く感謝したい。この拙い感想文も感謝のしるしである。

第一に、今更ながら、列席され発言された大学一般教育専任の教員の方々の心意気に感動させられた。専門教育専任の教員たちは、一般教育を考えるこういう場では、一般教育担当者の生まの声をと

かく聴くべきだと思う。

私の勤める東京都立大学では、教務組織である教養部に専属の教員はおらず、各学部の教員が教養科目をも担当するしくみになっている。そこで全教員が教養課程のことを考えていくべき立場に立っているわけだが、やはり他大学の一般教育専任者の心意気に比べると甘いという感じが残る。もっとも都立大学にあつては、全学的な一般教育委員会がカリキュラム編成面で大きな力をもち、各学部がむしろそれに押されがちだという実情も、ここで報じさせていたきたい。

第二に、専門科目との関連で一般教育のあり方を考えるという今回の企画は独特なもので、パネラーにも大いに意を得て見事だったと思う。ただディスカッションのほうは、司会者のイスカッション「結論を出す場ではない」として、提起された問題点にもう一歩つっこめなかったかという感じがなくはなかったが、これは参会者の責任でもある。

一般教育の基本認識、当該学部の専門にかかわる分野の一般教育、専科生にとっての自然系科目などのあり方について、パネラーはそれぞれ鋭く提起されていく。それらの提起は資料としてひろく他に知られるとよいと思う。

そこに伏在する問題として、専門教育にもまたがって、大学における研究活動・研究者養成と教育活動・学習指導との関係があるようである。一般教育はとりわけ学生の学習指導を浮びあがらせるわけだが、その教育的課題は専門科目や学問研究にとっても意外に

奥深いつながりをもっているのではないであらうか。

批判精神の涵養こそ

芝浦工業大学講師
生島 義之

工科系単科大学の一般教育を担当する私にとって、今回の会合は視野を広め、自分の考えを確めなおす上で意義深いものであった。特に国立教育研究所長木田氏や文部省大学局大学課長齋藤氏など、大学外部の方々への大学に対する発想の自由さには目を見張るものがあった。一方、大学側の意識はおおむね現行の科目の中身である個人のテーマ設定などに今日の個々のをどのように盛り込めばよいのかなどの教育技術論に終始してしまい、一般教育の中枢として批判精神の涵養をまず考える私は、その実現のための方策の模索が無かったことに、正直いって失望を禁じ得なかった。

批判精神の涵養ということとは、一般教育の問題としていつも題目としては掲げられるが、一向に具体的な討議に入れない。それはわれわれが今日、大学の内部のみならず社会全体において、いかに自由を喪失しているかの自覚を欠いているからだと思われ。

学問の内容をどれほど噛み砕いて学生に伝えようと、また社会の仕組を工学や経済学などの学問の成果によって巧みに構成して見せようとして、それは学生の思考や行動を型に嵌め、枠を設ける結果に終わる虞れがある。今日の学問は、学問の内容自体はもとよりだが、

●寄付金報告

56年8~9月

- △一般寄付金▽
 - 三〇,〇〇〇円 大英英語教育学会
 - 一五,〇〇〇円 第15回夏季セミナー殿
 - 一〇,〇〇〇円 明星大学通信教育部
 - 一〇,〇〇〇円 スクーリング受講生殿
 - 一〇,〇〇〇円 東京理科大学
 - 一〇,〇〇〇円 大沢ゼミ殿
 - 一〇,〇〇〇円 石井栄治殿
 - 一〇,〇〇〇円 樋口俊明殿
 - 一〇,〇〇〇円 原 秀治殿
 - 一〇,〇〇〇円 野猿峠自治会殿
 - 一〇,〇〇〇円 村上昌二殿
 - 一〇,〇〇〇円 学習院大学児玉ゼミ殿
 - 一〇,〇〇〇円 中央大学山田ゼミ殿
 - 一〇,〇〇〇円 法政大学技術連盟
 - 一〇,〇〇〇円 疋田正幸殿
- △視聴覚施設・設備充実募金▽
 - 五〇,〇〇〇円 第18回大学教員懇談会
 - 五〇,〇〇〇円 発題者、世話人一同殿
- △植樹資金▽
 - 三〇,〇〇〇円 千葉市幼稚園協会殿
 - 三〇,〇〇〇円 百目紅(紅白二本)
 - 百目紅(紅白二本)
- 千葉大学物理化学コロキウム殿

その伝達においても、このような拘束性についての反省を余りにも欠いている。一般教育が知識の体系である学問の伝達のみを指向する限りこの弊害を免れないばかりか、カリキュラムを整備し、大学の制度を合理的にすることに意を用いなければ用いるほど、一般教養課程においてすら精神の自由さは失われ、批判精神の涵養など思いもよらないことになりかねない。

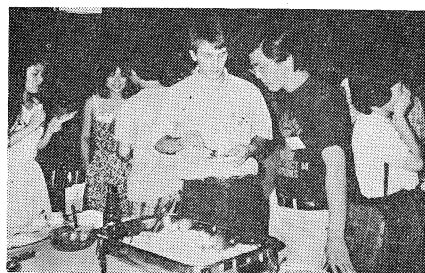
事業部だより

56年8・9月

夏の多彩な諸集會

●8月―夏休み前半の活況

7月下旬から8月にかけて、当ハウスは今年も夏休みの諸集會を迎える。第33回日米学生会議、第28回国際学生会議などの大きな国際学生会集會、大学英语教育学会(JACET)の第15回夏季セミナー、英語教育協議会(ELTEC)や語学教育振興会(COLTED)主催の語学集中訓練など全国規模の研究集會―いづれも「常連」グループの再来である。年々春・夏・冬の丘に集う文学教育研究者集団(文教研)は8月上旬いつもの期日に三泊の全国集會。広島原爆記念日の朝には今年も広島出身者が教師館屋上で「平和祈念の



昼食会で交歓する二つの国際学生会議の参加者たち(次ページ記事参照)

鐘」を打ってくれた。一番多いのは、やはり各大学の利用。夏休みには二泊組が圧倒的に多くなり、三泊以上も少なくない。千葉大医用電子工学研究会、京浜女子大の自然観察講習会とはともにも八〇名前後の大きな集會であるが、三泊四日の日程で余裕のある合宿を過ごした。なお、今年も7月下旬からの約一ヵ月間、中央・明星両大学での夏季面接授業(スクーリング)に出席するため全国各地から上京した「通教生」に、ユニット・ハウス宿舎の一部が提供されている。

この8月は、宿泊者二〇〇人以上三〇〇人という日が二五日もあり、昨年同様連日満杯あるいはそれに近い状態が続いた。グループ数一六、宿泊延人数七、二六八(宿舎利用率八七%)。なお、同延人数に占める会員校・非会員校の比率は七〇%、教育団体二五%、企業等五%となっている。

●9月―各大学の合宿が集中

近年夏季休暇の終了を9月後半とする大学が増えている。かつて夏休みの後に行われた前期試験を7月中に実施し、8月そして9月の大半を休暇に当てるこの新しいスケジュールは当ハウスの利用にも変化をもたらし、夏休み後半にあたる9月はゼミ合宿の集中で、利用グループ数が年間最も多い月となっている。今年も合宿件数一三二(うち会員校九五)、宿泊延人数も五、五八八人(宿舎利用率六九%)の多きに達した。三泊組が増え、四泊以上も八グループ。なお、延人数の構成比率は会員校六一%、非会員校一五%、学会等一

八%、企業等社会人グループ六%となる。

法政大技術連盟の傘下一一研究会から計一二六名が参集した夏季グループ・リーダーズ・キャンプ(GLC)は一五年目の利用。山梨英和短大英文科の全教授と第二学年全学生計一六九名が参加した恒例の秋季英文学セミナーでは、島田謹二教授が今年も熱のこもった比較文学の集中講義をされた。横浜国大教育学部歴史学教室五グループの合同研修は二年ぶり―いづれも月の前半二泊三日で行われた「常連」グループの大型合宿である。中旬二泊の産業能率短大経営管理学科岡部・阿部・麻田の三ゼミ計五一名の合宿は、準協力会員校加入後の同短大の初めての利用である。また後半には、通常のゼミ合宿に混って、日本女子大岡本栄一教授が担当された日本心理学会ワークショップ、日本山岳協会恒例の研修会、学習院大の事務主任研修会など多様な諸集會が開催されている。

●立大ウィーク

夏休み終了も近い9月中旬以降の一週間には立教大グループの合宿が集中し、「立大ウィーク」の観を呈した。今年も四泊五日で開催された文学部「集中合同講義」(六一名)、ともに三泊の産業関係学科武沢ゼミ(六〇名)と野々口ゼミ(三七名)、二泊の観光学科木平ゼミ(四四名)と経営学科茂木ゼミ(一四名)、そして教育学科カウンスリング・ゼミ(一〇名)など―立教大だけでこの一週間に六グループ、延べ六二八名を迎えたことになる。

海外日本語講師

研修会の一週間

韓国外語大学 日本語講師 金 春 美

大学セミナー・ハウスでの一週間はとても楽しいものでした。私は二ヵ国からの四八名が一つのグループになっており、それがから八王子に行ったのは到着してから一週間にしかなってはいない時でしたので、お互い何となく疎遠な気がしていました。それが一つ釜のメンを食うという環境のおかげで最短時間に最大の効果をあげたといえますが、皆とても親しくなれました。これは私達のような特殊なグループだけでなく日本の大学生にも該当する八王子ならではのメリットだと思います。食堂にかけてあった「plant living, fish thinking」を地でいったような生活も少しは苦になりましたが、それも精神的な充足感で補いながら楽しくすごさせていただきました。



茶道の体験を楽しむ外国人日本語講師たち(遠来往)

48年の発足以来、毎年当ハウスで行われている「集中合同講義」では、それに先立つ数年前、学生たちから起こった「大学」に対する異議申し立て運動への一つの回答として、その試みの成り行きが注目されてきたが、今や着々と成果をあげ、大学内にその独特の役割を定着させつつあることは喜ばしい。渡辺一民教授はこの企画の意

義について以下のように言っておられる。

「集中合同講義は、まず何よりもいわゆる専門の枠にとらわれることなくアクチュアルな今日の問題をあえて全体のテーマとして選ぶことにより、学生一人一人の生にかかわる問題意識に可能なかぎりこたえていくことが主眼とされているのである。それは同時に、

リットとして今一つあげられますのは、教授との語り合いの場が自然に作られるという点です。自然にかこまれて心のふれあいがある。日本の学生達はラッキーだと思いましたが、それに、一度八王子にいらいちゃったが最後お泊りにならざるをえなかった先生方の事情のおかげで、集中的に講義が行われましたので(それに別の気晴しの手段もありませんでしたので)勉強の能率はずいぶん高くなつたと思います。また今年のような研修がありましたら、学生達との交流の機会をもっと作り、日本の大学生の考え方や生活を知りたいと思います。本当に楽しく有益な一週間をすごさせていただきましてありがとうございます。

とかく専門の枠のなかに閉じこもって思考の動脈硬化に陥りやすい教員が、若い学生のするどい問題意識に触れることによってつねに新しい視野を開いていこうとする、謙虚な希いにささえられたものであることをつけ加えておかなければなるまい。わたし自身四泊

◆わたしたちの合宿

思いがけぬ発見

津田塾大学 ITC 合宿

津田塾大学講師
山本 芳美

津田塾大学では昭和43年、英語を母国語とする教師たちと生活を共することを通して、学生たちが生きた英語をより早く、より深く学ぶことができるようにと、ITC (Intensive Training Course) を開講した。当初は三、四年生を対象とし、学内でのオリエンテーション、授業に始まり、学外での二週間の合宿を経て、再び学内にもどり、仕上げを授業で締めくくるといふ、今よりは多少期間をかくけての文字通りの強化合宿であった。

その後、このプログラムはますます強まる英語修得の必要性和学生からの熱心な要望に支えられ、期間の短縮、全学年への対象拡張等、若干形と内容を変えながら、当初の意図を受け継ぎ、今日に至っている。昭和53年以降は、八王子の大学セミナー・ハウスを会場として、約一週間の合宿というのが恒例となっている。

五日の肉体的にもけつして楽でない八王子へ毎年のように出かけていくのも、そこでは読書や日常的な教師生活では知りえぬ少なからぬ新しい経験が見いだされるといふ期待ゆえなのである(『立教』第95号から)。

昭和56年度のITCは、九月上旬、セミナー・ハウス内の長期セミナー館で開かれ、学生一八名、教師五名が参加した。合宿中は授業(会話、講読、ディベートおよびスピーチ、時事英語、詩の朗読)の間はもちろんのこと、日常生活もすべて英語で行われ、ありとあらゆる機会をとらえ自分の意思を英語で表現する訓練がなされた。

文字どおり二四時間、日本語は一切ご法度、英語だけで用を足すという、不自然といえれば不自然なやり方がどんな結果を生むか、多少の懸念がないでもなかったけれども、学生たちは案外平気で、初



野外での小グループ授業——津田塾大 ITC (国際セミナー館前庭)

●今夏の国際的諸集會
この夏の当ハウスのキャンパスは例年にも増して国際色が豊かであった。前述の「常連」グループに加え、今年は大ハウス初利用の国際集會を迎えたからである。食堂や交友館での内外人の交歓風景も、すっかり日常的なものとな

日の緊張感が解けると、実に積極的に授業に参加してくれた。とくに大学の授業にはないディベートに興味を示し、「津田塾大学」として共学は是非か」等々の議題に取り組み、おのおの相手を説得せんと、それこそ大変な意気込みで私たちを感嘆させた。

また自由時間には、学年の違いを越えた交流も盛んで、その成果か、サヨナラ・パーティーで演じられたITCを戯画化しての寸劇は、思いもよらぬ出来ばいで、彼女たちの隠された才能をあらためて発見するいい機会を与えてくれた。たまたまセミナー・ハウスに宿泊中の米岡オレゴン州のウィラメット大学の学生たちとも交歓の機会に恵まれ、国際交流の真似事にしる体験できたことは、大変な幸運と感謝している。

参加した学生の中には、果たして授業についていけるのかどうか、心配をいだいていた者もいたようである。が、森に囲まれたこの静かな環境の中で教師も学生も一緒に寝食を共にすることから生まれる連帯感によって、むしろ今までもないエスレギーを自分自身の中に発見して、新しい課題につきつぎぶつかっていくことができたようである。

った。

まず「常連」では、二年ぶりに迎えた日米学生会議(JASC)。当ハウスの初めて同会議の会場になったのは42年。日米両国で隔年ごと交互に開催されるこの会議の東京での開催場所は、以後いずれも当ハウス。今年ですでに八回目である。7月27日に到着して五泊した日米両国の学生九二名は、今回の総合テーマ「変わりゆく世界における協同と進歩」を多面的に検討するため、一一の分科会に分かれ、日夜研修旅行や討論に積極的に取り組んだ。

8月1日同会議と入れ替えに入館したのは、当ハウスでの開催六回目の国際学生協会(ISA)主催第28回国際学生会議。この方にはアジア諸地域八ヶ国からの学生三六名と日本人学生計一一〇名が参加。「世界平和への相互理解」を総合テーマに「南北問題」「差別のない社会」「難民救済における国際協調」などについて討論している。一昨年夏初めて交流を試みた右記二つの学生会議は、今年も7月31日、当ハウスで合同シンポジウム「アジアと米国の学生相互の理解と友情を求めて」を開催した。わずか一日の企画ではあったが、昼食会での交歓(別掲写真)をはさんで自由な討論の機会を持ったことは、日米学生会議参加の学生とアジア諸国の学生双方にとって極めて有意義であったようである。

なお、第28回国際学生会議会期中の8月3日、夕食後に恒例の「盆踊り大会」を開催。ここでは他の在泊グループ、近隣の子供会など地元の人々約二〇〇名と諸外

国からの若者たちが交歓のひとつを過ごした。

米岡オレゴン州ウィラメット大日本研究グループは8月30日夜半近くに成田空港から到着した。以後二週間国際セミナー館等に滞在、約四ヶ月にわたる日本滞在に備えて日本語の集中訓練とオリエンテーションを受けた。同グループは姉妹校である国際商科大との交流計画の一環として隔年ごとに来日するもので、当ハウスでの合宿は50年以來四度目である。今回のメンバーは引率のハンド教授夫妻と一五名(うち女子七名)の学生。いずれも元気に溢れた米国の若者たちは、数日後には当ハウスの生活にすっかりとけ込んで、在泊の日本人学生とも自然な交流を築きむようになった。

たまたま夏休み終了前の9月中旬、今年四回目の利用ですっかりおなじみとなった津田塾大自主ITC(英語集中訓練)が一週間の合宿を行った。生きた英語を習得するために、外国人を含む教師五名と学年・学科を越えた学生一八名は、終始「英語だけ」の生活を続けた。指導教官のはからいもあって、早速二日目の夕食時にはウィラメット大の学生と食卓を共にした。英語を話す日本人学生と日本語を学ぶアメリカ人学生とのこの「異色の」コミュニケーションも、「当ハウスならではの体験」と喜ばれた。なお、本号の「わたしたちの合宿」紹介欄に津田塾大ITCのご登場をお願いしたところ、今回指導に当たられた内外人教師五名の方々が共同で上掲の一文を用意して下さいました。(8ページ4段めへつづく)

ノースカロライナ・ジャパン・センターの
日本語研修を終えて

国際日本語普及協会事業部長 坂本きく枝

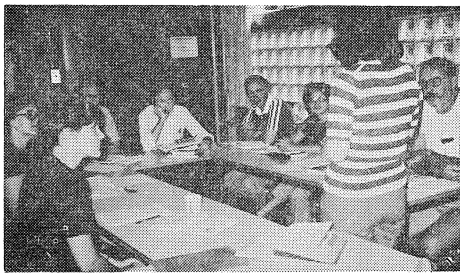
一九八〇年秋、米国のノースカロライナ州立大学に、附属機関としてノースカロライナ・ジャパン・センターが、日本企業誘致計画をきっかけとして設立された。日本と日本人についての研究を深め、日米相互理解のための情報を提供することを目的とするものである。そして第一回の試みとして、同大学の教授、助教授の中から研究員を選び、来日に先立つて〇ヶ月の間に、一八〇時間をかけて日本語の初級を研究し、それを卒えた七名のメンバーが、この8月7日、東京に派遣されたのである。

このメンバーの一人、バークストレッサー教授(繊維化学専門)の話によると、「ノースカロライナ州の特産物はタバコ、綿花、綿織物で、同州生産のタバコの葉だけをみても、日本の専売公社に年間三五〇万ドルの輸出をしている。また、綿織物を織る紡織機械は日本から輸入しているし、『味の素』をはじめ、日本企業の同州への進出もめざましく、従来から日本との交流は深い。われわれはもともと日本を知りたいし、それにはまず日本語をマスターすることが先決だと思っている」とのことだ。

今回来日の一行は、バークストレッサー教授(五〇歳)を最年長に一番若い三〇歳のデビット・フラー助教授(経済学)まで、年齢の幅も広く、その専門分野も政治、教育、演劇、化学、建築など多彩である。

一行が東京に到着した翌日から早速、日本語集中研修がはじまった。私の所属する日本語普及協会がその教育係を委託されたわけである。若いけれども技能には自信のある三人の女性が教師役を担当、大学セミナー・ハウスの国際セミナー館に合宿しての特訓である。毎朝の9時30分から午後3時20分まで四週間にわたって計一五〇時間の集中訓練である。

はじめのうちは口の重かった十七人のメンバーも、一週間がすぎると頃には環境にも慣れ、セミナー・ハウスに来ている日本人学生とカタコトの会話をできるようにな



少人数に分かれて日本語の特訓を受けるノースカロライナ大教授たち(国際セミナー館)

る。たまたま英語研修中の日本人学生と食堂で交歓し、日本人の英語に対して、こちらは日本語での応対に汗をかいたといった珍しい場面もみられた。それにしても一行は実によく勉強した。従来は教える立場の専門家だけに、教える側の創意工夫には敏感である。教師の熱意に対しての受けとめ方は見事だった。

日本語研修が終わった日は、ノースカロライナのメンバーにとっても、お互いの別れの日なのだ。というのは、あすからはまた、かれら一人一人が、ある人は北大、ある人は京大、広島大、東大……といった具合に、志望の各地研究機関に散っていき、そこで六ヶ月間、さらに専門の勉強をして帰国することになっているからである。

いよいよ、お別れの晩である。静かな夜景を背景に、交友館で開かれたフェアウェル・パーティでは、一人一人がここの生活と教師に対する感想を、修得の日本語で述べる。ことばの数も限られた日本語ではあったけれども、こめられた心情はしっかりと伝わった。最後には全員が手をつないで、「螢の光」を歌い、閉会となった。快いパーティだった。私たちにとっては不安な長い日々だったが、大役を果たして一息つけた喜びと、一行との別れの哀しみを同時に思った思い出の日となった。

その日、みんなから述べられた感想の一部をここに紹介したい。

ウィリアム・ホラー助教授(英語学)「日本語の学習はたのしかった。セミナー・ハウスでの生活

(前ページよりつづく)

●外国人の日本語学習

いま世界の各所で真剣に日本語を学習(あるいは教授)している人々がいる。その数は一〇〇万を超え、年々急速に増加しているといわれる。国際間の相互理解における言語の重要性も改めて認識されている。今夏当ハウスが初めて迎えた二つの国際的な合宿研修は、いずれも外国人の日本語教育を目的とするものであった。

一つは国際交流基金主催の「海外日本語講師研修会」。アジア、大洋州、中南米、欧州、北米諸地域・二ヵ国の大学の大学などの教育機関で日本語教育に従事している外国人日本語教師男女計四八名が、7月中旬の六日間、日本語および日本語教授法、日本事情について集中的な研修を受けた。言語、文化、慣習等を異にする人々の合宿であったが、日本語を共通語に生活した各国の参加者たちは、「都

もたのしかった。食事はすこし大変なときもあったけれども、日本では日本のもので、日本のことに従うべきだと思っから、不満とは思わない」

アレックス・C・チャオ助教授(都市工学)「このようないい環境のなかで勉強できたことはとてもよかったし、先生たちに感謝している。大学セミナー・ハウスの人たちも、とても思いやりを示してくださって楽しく過ごせた。ただ蚊には悩まされつつ、チャオさんは(どういふわけか、チャオさんは他の人がさされない時でもさされたのです——陰の声)

リンダ・W・サンダーズ助教授

会を離れた自然の中で」「不思議と深い親密感に結ばれ」、よって「学習の効果もあげることができた」という。夕食時の交歓会、夜の交友館での在泊グループとの交流、遠来荘での茶会のひととき(6ページに写真)も、有意義な体験であったようだ。韓国から参加した金春美さんから、後日別掲の感想が寄せられたので、原文のまま紹介することにした。

もう一つは「ノースカロライナ日本センター」の特別研究員として来日した教授陣一六名の日本語研修。一行は「真の日本理解はコトバから」と、それぞれの専門分野での調査研究に先立ち、8月初旬からの二八日間、当ハウスにかん詰になって「特訓」を受けた。この長期にわたる合宿については、同研修の運営一切を委託された国際日本語普及協会の坂本きく枝事業部長から上掲の報告をお寄せいただいた。

(建築学)「日本のお風呂はとても楽しかった。ただ時間が過ぎていたことや、その他、規則が多かったことには不便を感じた。セミナー・ハウスの人々はとても親切だったし、八王子の町もおもしろかった。日本語のコースではとても多くを学んだし、少しは話せるようになった。先生の教え方はエクスセレントだった」

最後に、ノースカロライナ・ジャパン・センター長のジョージ・ルヴェンスタ氏から届いた手紙にも、セミナー・ハウスのスタッフのみなさんのご親切に対する心からの感謝が述べられてあったことを付け加えたい。

◆千人会

昭和56年8~9月

◇現在会員は一、六五〇名です

大学人Ⅱ一、二、三七名
社会人Ⅱ 四一三名

◇新しく会員となられた方々

4名(第60回報告(申込順))
東京工業大学教授 野田 偉殿

C 専修大学教授 麻島 昭一殿
C 日本債券信用銀行 小川 正浩殿
C 慶応義塾大学教授 伊藤 喜栄殿

◇会費ありがとうございました
56年8~9月(敬称略)
藤原鎮男、伊藤清子、松崎義徳、大蔵隆雄、米村貞蔵、滝幸三郎、大吉芳彦、横田澄司、原誠、川合龍男、村瀬興雄、奥田夏子、芥川浩、菊地雄二、平山英樹、柳田博明、芹沢正三、鹿島健次、高村象平、黒田孝郎、三宅彰、安藤良雄、新井勝敏、浅井邦二、萩原洋太郎、長浜洋一、岡本剛、村松暎、小林正一、十代田知三、井上孝、神山四郎、西藤、岡本哲治、麻島昭一、小田切松義、伊藤一郎、時枝満康、佐野晃、萩原龍夫、山本武彦、志賀英、山本芳文、斎藤国治、宮野三郎、井出翁、藤田淑子、中川重雄、海老沢克之、山田勇、村上光雄、福島正久、米山弘、小沢重男、柳下綱道、田中弥寿雄、慶谷利代、岡林祐子、渡辺昭夫、慶谷伸光、国岡昭夫、高野史郎、児玉久雄、小川信子、小松宏晨、原田行男、白濱謙、佐藤豪、加藤栄一、市川博、村上陽一郎、押田勇雄、

岡安茂祐、朽津耕三、下田弘、石川達雄、平島幸太郎、岡村文子、片山寛、平井久、片山清一、武澤信一、岩内亮一、福山仙樹、早弓惇、藤永光之、竹下敬次、松本健次郎、子安美知子、古賀正則、太幡祐己、宮坂宏、永井克孝、榎林博太郎、田中庄蔵、圭室文雄、伊藤喜栄、宇川和子、千葉正士、岩崎不二子、石村善助、井深淑子、中村英勝、谷俊治、高村多賀子、滋賀秀三、松尾登、松田徳一郎、町野朔、三村卓雄、森口繁一、横山宏、岡村秀勇、増田茂樹、山岡喜久男、岡村甫、荒井良雄、飯吉厚夫、花島重春、小堀桂一郎、井手久登、西村善四郎、大東百合子、合田周平、古屋野正伍、佐藤康胤、鞍馬菊枝、岡野行秀、吉利和、小田切美文、高村弘毅、久武雅夫、関本昌秀、鈴木忠義、田中昭二、岡野澄、大澤綱一郎、川村亮、鈴木守、尾形憲、加藤五六、東寿太郎、島袋嘉昌、朝倉孝吉、尾形典男、伏見弘、飯島宗享、安嶋彌、泰本融、讃岐和家、河野恵、横田英嗣、飯田経夫 以上

「大学時報」159・160号
日本私立大学連盟殿

「工学院大学研究報告」50号
工学院大学図書館殿

「中央公論」10月号、「続統」科学
的観念論」 笠原正成殿

「大学研究ノート」48・49号
広島大学大学院教育研究センター殿

「教育は何のために」石堂常世殿
「Asian Book Development」9月
ユニスコ・アジア文化センター殿

「研究と獨創性」 日本学術振興会殿
「現代詩研究」 現代詩研究所殿
「国際交流基金年報」56年度版
「国際交流」29 国際交流基金殿
「国際協力」10月号 国際協力事業団殿

「教育の理論と課題」河田喬夫殿
「フイリピン社会人類学」 菊地 靖殿
「東海大学紀要」11
「都市の解剖学」 小池 滋殿

「寄贈図書」
56年8~10月
「大学生の学習技術」 林 潔殿
「国際シンポジウム英文報告書」
法政大学国際交流センター1殿
「早稲田大学法学会誌」第31巻
「早稲田法学」第56巻1・2号
「人文論集」第18号
早稲田大学法学会殿

「利用状況」
* 11月2日利用
* 11月3日利用
* 個人・日帰り利用者を除く
8月
(116グループ、延七、二六八人)
東京学芸大学助教授 中野 良頭
東京大学助教授 小島 晋治
東京薬科大学剣道部 宮崎 宏
日本大学助教授 小林 保彦
青山学院大学助教授 羽田 三郎
立教大学体育会自動車部 瀬野精一郎
早稲田大学助教授 横田 澄司
明治大学助教授 寺中 良二
駒沢大学助教授 *

●キャンパス点描

8月15日夕食時の食堂で在泊の七グループが交歓。日本語研修で合宿中のノースカロライナの教授陣もピアノ演奏や合唱を披露。8月29日井上勝也教授と教育学コロキウム。卒業生計一四名が紅白の百日紅二本を第4セミナー室横の斜面に記念植樹(下掲写真)。

9月12日「中秋の名月」の夕食時に二グループが交流。相互の紹介に続き相良亨東大教授がスピーチ。月見ダンゴも供された。9月26日井上常先生(東京女大名誉教授)が同大卒業生との0

芝浦工業大学教授 高橋 清
国際基督教大学教授 井上 和子
中央大学講師 小島 武司
駒沢大学講師 清水 卓
聖心女子大学助教授 里見 貞代
東洋大学助教授 井出 翁
東京都立大学助教授 桐谷 維
東京大学助教授 伊藤 誠
青山学院大学助教授 国岡 昭夫
中央大学講師 山田 弘史
明治学院大学社会学科自主ゼミ 新田 義弘
学習院大学助教授 児玉 久雄
東京学芸大学助教授 小野 賢
東京学芸大学助教授 小林 弘
千葉大学助教授 井上 勝也
東京大学助教授 荒井 良雄
東京大学助教授 井田 敏介
横濱国立大学助教授 楠井 宗明
東京学芸大学助教授 松崎 奈岐
千葉大学助教授 武蔵 武彦
東京都立大学助教授 光延 明洋
東京理科大学助教授 國分 康孝



恒例の夏合宿で記念植樹の千葉大物理化学コロキウム

歳児発達研究会で六年ぶりの合宿。交友館接待のお茶で開館当時の思い出を話され、「その時の共同セミナー参加者」とも毎月自宅読書会をしていますとのこと。

福島大学助教 星野 珉二
 東電学園大学部
 明星大学通信教育部
 京浜女子大学生物学研究室
 玉川大学教授 田中 宏
 芝浦工業大学柏高専英語部
 明治学院東村山高等学校
 第33回日米学生会議
 日本国際学生協会
 語学教育振興会
 大学英語教育学会
 ヒューマン・エコロジイ研究所
 日本金融論研究会
 政治経済学会
 文学教育研究者集団
 千葉市幼稚園協会
 東京都高等学校英語教育研究会
 聖書キリスト教会久米川集會
 リコーダー・ワークショップ
 日本キリスト教団白鷺教会
 日本作業療法士協会
 英語教育協議会
 小学校教師自主研究グループ
 日本基督教団国立教会聖歌隊
 多摩地区看護学校教官研修会

予 告

▼第117回大学共同セミナー
 主 題 都市と文学
 期 日 昭和57年1月8〜10日
 ▲全体講義
 都市とユートピア 小野二郎氏
 ▲セクション演習
 A ロンドン(小池滋氏) / B 都市とアメリカ文学(金関寿夫氏) / C パリという名の書物(清水徹氏) / D 「たけくらべ」と明治の下町(前田愛氏)
 ▲運営委員 小池滋、前田愛両氏
 ▲締切日 昭和56年12月21日
 ▼第118回大学共同セミナー
 主 題 コンピューターと人間

産業能率大学問題解決ゼミナール
 新東京日産自動車販売
 日本電気*
 企業開発ゼミナール
 小西六写真工業
 沖電気工業*
 富士フアコム制御
 富士電機製造
 東京プロックフレーターン・コア
 京王百貨店
 ●9月
 (132グループ、五、五八八人)
 慶応義塾大学英語会 佐藤 勝磨
 日本大学講師 森住 衛
 大妻女子大学講師 加藤 寛
 慶応義塾大学教授 関 美奈子
 津田塾大学教授 敷田 礼二
 立教大学教授 中野 光
 武蔵大学教授 私市 保彦
 駒沢大学教授 松浦 智紹
 駒沢大学教授 馬屋原成男
 駒沢大学教授 熊沢 孝
 千葉商科大学教授 熊沢 孝
 東京大学助教 井上 博允
 東京外国語大学助手 高橋 政明

期 日 昭和57年3月19〜21日
 ▲全体講義
 電気通信大学教授 森口繁一氏
 ▲ゲスト講演
 電子技術総合研究所 淵 一博氏
 ▲セクション演習
 A オフィス・オートメーションとサラリーマン(魚木五夫氏) / B 工場オートメーションと技術者の役割(石井威望氏) / C コンピューターと犯罪(石田晴久氏) / D 情報化社会における家庭生活(川畑正大氏)
 ▲運営委員 黒田道雄氏
 ▲締切日 昭和57年3月2日

東京都立大学教授 東 洋一
 慶応義塾大学教授 矢崎 武夫
 東京経済大学新入職員研修 高橋 和宏
 東京都立大学助教 高橋 和宏
 東京大学教授 松原 治郎
 東京女子大学教授 伊藤 善市
 津田塾大学助教 小倉 充夫
 法政大学校友会技術連盟
 東京大学教授 木村尚三郎
 東京都立大学教授* 石村 勝助
 早稲田大学教授 寄本 清
 芝浦工業大学教授 高橋 清
 横浜国立大学歴史学教室
 武蔵大学教授 大村 好久
 東京大学教授 溪内 謙
 早稲田大学教授 由井 正臣
 東京経済大学教授 柴田 高好
 千葉商科大学助教 平井 克彦
 駒沢大学教授 江上 勲
 埼玉大学助教 白井 宏明
 お茶の水女子大学助教 森田 明
 青山学院大学教授 寺谷 弘王
 東海大学湘南公開セミナー委員会 竹内与之助
 東京外国語大学教授 清水 望
 早稲田大学講師 阿久沢利明
 法政大学講師
 東京女子大学点字友の会
 津田塾大学ESS
 東京大学教授 相良 亨
 東京大学教授 坂本 義和
 一橋大学教授 細谷 新治
 明治大学教授 原 正彦
 文教女子短大教授 木名瀬信也
 早稲田大学教授 大春慎之助
 早稲田大学若手研究者の会
 法政大学教授 石谷 行
 明治学院大学教授 小野 哲郎
 明治学院大学教授 清水 徹
 法政大学教授 兼子 春三
 早稲田大学講師 北野 弘久
 早稲田大学教授 浅井 邦二

青山学院大学教授 深沢 実
 津田塾大学ITC 津本 洋哉
 中央大学助教 鈴木 幸毅
 中央大学教授 角田 邦重
 中央大学教授* 竹村 孝雄
 津田塾大学教授 三浦 永光
 神奈川大学建築研究会
 東京農業大学栄養化学研究室
 青山学院大学助教 寺東 寛治
 早稲田大学助教 田村 恭
 立教大学助教 福山 清蔵
 学習院大学音楽愛好会
 明治学院大学教授 竹内 真一
 東京経済大学教授 中村 貞二
 東京経済大学教授 竹前 栄治
 中央大学教授 小川浩八郎
 慶応義塾大学教授 渡部 康一
 明治学院大学教授 小野 哲郎
 相模女子大学講師 矢内 宗紫
 立教大学集中合同講義
 立教大学教授 松平 誠
 中央大学教授 富岡 幸雄
 中央大学助教 大須 眞治
 学習院大学教授 荒井 良雄
 東海大学教授 藤家禮之助
 東京大学助教 見田 宗介
 立教大学教授 武沢 信一
 立教大学教授 野々口格三
 立教大学教授 茂木 虎雄
 立教大学教授 副田あけみ
 日本大学教授 中川 和彦
 東京工業大学教授 堀内 清司
 上智大学教授 黒沢 一清
 東洋大学教授 飯島 宗享
 東京理科大学教授 飯島 文輔
 学習院大学事務主任研修
 産業能率短期大学
 岡部・阿部・麻田3ゼミ
 立正大学教授 中村 孝之
 立正大学教授 村瀬 興雄

創価大学東南アジア研究会
 都立川短期大学児童心理学ゼミ
 亜細亜大学助教 香川 敏幸
 山梨英和短期大学英文学科
 ウィラメット大学日本研究ゼミナール
 阿佐ヶ谷美術専門学校
 都留文科大学地理ゼミ
 東京造形大学教務部
 東京工業高等専門学校*
 第18回大学教員懇談会
 日本心理学会
 国際日本語普及協会(ノースカロライナ日本語研修講座)
 全国社会福祉協議会
 カンパード長老キリスト教会
 トミー植松語学センター
 日本基督教会東京中会
 0歳児発達研究会
 日本山岳協会
 関戸電機
 A・D・O
 京王百貨店
 旭ダウ
 日本電気
 酒類食品流通研究所
 ジェイ・エス計算センター
 ジェイ・エイ・エイ・ジャパン
 富士電機製造
 東京芝浦電気

編集後記

制度の整備とともに内面の形骸化・空洞化が深まるおそれにおいて、大学もその例外でないことを今回の大学教員懇談会は物語るという実践課題の所在をあらためて実感させられる。本号で今年のニュース発行は終わる。新年に向けて皆様方の一層のご自愛、ご支援を祈念します。(岡山)